

一

次の各問いに答えよ。

問一 次の傍線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に改めよ。(楷書ではっきり大きく書くこと。)

- ① この事業は国から県にイカンされた。
- ② この踏み切りの前では電車はケイテキを鳴らす。
- ③ 軽犯罪に問われ組織からジヨメイされた。
- ④ この地は東北有数のコクソウ地帯である。
- ⑤ 郵便局にお金をアズけている。
- ⑥ 私腹をコやすようなことをしてはいけない。
- ⑦ 労使の間で折衝を重ねてきた結果である。
- ⑧ 小さな妹が殊勝にも姉をかばっている。
- ⑨ 彼は拘留期間が切れたので釈放された。
- ⑩ 本日の行事はすべて滞りなく終わりました。

問二 「目的を果たすため辛苦すること」という意味で使われる故事成語はどれか。最も適当なものを次のア～オのうちから一つ

選び、記号で答えよ。

- ア 捲土重来 イ 夏炉冬扇 ウ 汗牛充棟 エ 虚心坦懐 オ 臥薪嘗胆

問三 次の俳諧(句)の季語のうち、季節が他と異なるものが一つある。その句を一つ選び、ア～オの記号で答えよ。

- ア 行き行きてたふれ伏すとも萩の原
イ 菊の香や奈良には古き仏たち
ウ 荒海や佐渡によこたふ天の川

エ 旅に病んで夢は枯れ野をかけめぐる
オ 岩はなやここにもひとり月の客

問四 次の作品のうち、『羅生門』の作者が書いた作品を次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。
ア 小僧の神様 イ 戯作三昧 ウ 破戒 エ 武蔵野 オ 黒い雨

問五 次の一文を読んで、後の問いに答えよ。

濃い緑色の葉のすき間から黄金色の蜜柑がチラチラと覗いている。

- (1) 右の文には、用言がいくつ用いられているか。数字で答えよ。
(2) 右の文に用いられている形容詞の活用形を答えよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

※本ページにおける一部の文章については、著作権法の規程に基づき掲載しておりません。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

※本ページにおける一部の文章については、著作権法の規程に基づき掲載しておりません。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

※本ページにおける一部の文章については、著作権法の規程に基づき掲載しておりません。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

問一 二重傍線部 **a**「鳥瞰図的に」、**b**「心を虚しくして」の、ここでの意味として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

a 鳥瞰図的に

- ア 高く垂直な位置から見るように
 - イ 鳥のようなのんびりした気持ちで
 - ウ 高いところから見下ろすように
 - エ 鳥のように清らかに無心の状態で
- b** 心を虚しくして

- ア 先入観をたず素直な心で
- イ 心がつらくはかない思いで
- ウ 精神を集中して文字と向き合って
- エ 眼光紙背に徹すといった姿勢で

問二 傍線部 **A** 「岬そのものが光っている」と言つて・・・意味が違う」とあるが、筆者が違ふと述べている二通りの解釈を端的に示した部分を、それぞれ本文から抜き出せ。

問三 傍線部 **B** 「ある種の既成観念があり予断がある」とあるが、ここでの既成観念や予断にあたるものとして最も適当なものを

次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 灯台のある風景が、小さく、かわゆらしく、清らかでしずかに感じられるということ。

イ 海に突き出た岬の風景は、人間の限界を表現するのに適した場所だと考えるということ。

ウ 作者暮鳥が牧師であり、灯台はキリストの教えであるという考えに基づいているということ。

エ 「岬の光り」と「岬に立てる一本の指」が、灯台を指していると思いついてしまうということ。

問四 傍線部C「象徴説の絵解き」とあるが、この「象徴説の絵解き」にあたる部分を、本文に例として示されている鑑賞文の中

から探し、はじめと終わりの八文字を抜き出せ（句読点を含む）。

問五 この文章の見出しとして最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 岬の情景

イ イメジの重要性

ウ 一語の読みとり方

エ 牧師山村暮鳥の世界

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

先年嫁いで二児の母親になつてゐる上の娘が家に来た時、私は二匹の犬の専用通路のことを話題に取り上げた。そして娘を庭の隅の杏の木の根もとのところまで同行させ、塀に沿つた雑木の茂みの中を犬道がどのように走つてゐるかを説明した。娘は生れ付きこうしたことには関心を持たない性格で、半ば迷惑そうに庭の隅までついて来ていたが、ほんとに犬の道があるわね、でもここはこう通るんでしよう、ほら、ここが道になつていきますと、身を屈めて地面を覗き込みながら、私の説明を多少訂正するような発言をした。娘が指し示すところを見ると、山桜の白い花卉が一面に散り敷いてゐる地面に、なるほど犬の足跡と覺しきものがたくさん捺されてゐるのが見られた。帯状をなしてゐるその部分だけ、白い花卉は泥にまみれて無慚な感じになつており、確かにそこが犬の通路になつてゐることを示してゐる。私が犬の通路であると考えていたところは檜の切株の向うを回つており、白い花卉の散り敷いてゐる場所からは外れてゐた。しかし、眼の前に証拠を突き付けられた恰好で、私は娘の言うことに従わないわけには行かなかつた。すると娘はこんなことに大騒ぎする父親の気持が判らないとでもいうように、友子だつて、ちゃんと自分の道というものを持つていますよと言つた。友子というのは娘の子供で、私にとっては孫娘に當る六歳の幼女である。この間までは幼稚園に通つていたが、この春から小学校に通ひ始めている。

娘は言う。幼稚園の送り迎えをしてゐると、子供たちには子供たちの道があるということが判る。子供たちはいつもそこを通りたがる。どうしてこんなところを知つてゐるのかと思ふような裏通りの道で、時にはひとの屋敷ではないかと思ふようなところをも小さい靴で踏んで行く。送り迎えは母親たちが交替でやるので誰かがそんな道を連れて通つたことがあるのであろうが、とにかく子供たちはそこを通りたがる。別段面白い道でも楽しい道でもなさそうだが、子供たちの足はその方へ惹かれて行く。どうせ遊びなんだからと思つて、自分が当番の時はいつてもそこを通つてやるが、ああいうのは子供の道とでも言うのではないであらうか。

娘一家は二年ほど前に神奈川県の田舎に建てられた会社の社宅にはいつており、同じ会社の従業員の家族が何十組か三棟のアパートに配されてゐる。もはや東京の子供たちには登校する道の選択などということとは考えられないが、田舎に住んでゐるお蔭で、孫娘の幼稚園の行き帰りにはまだそのような余裕が残されてゐるのである。

娘に言われて、確かに子供には子供道があると、私は思つた。犬道に気をとられて、子供道に思いを①なかつたのは、われながら不覺に思われた。私は書齋に引き返すと、縁側の籐椅子に凭もたれて、柴と紀州の二匹の犬が春の陽光を浴びて寝そべつてゐる

のを眺めながら、犬道ならぬ子供道のことを考えた。私は伊豆半島の中央部の天城山麓の山村に育っているが、子供の時のことを振り返ってみると、村中を何本かの子供道が走っていたことに気付かざるを得ない。溪谷の共同風呂に行くにも、隣村の親戚に使いに行くにも、子供たちは自分たちだけの道を持っていた。毎朝の登校路など今考えてみると奇妙なものである。田圃の畔道を通り、小さい崖を降り、何軒かの農家の背戸を縫った上で、小学校の前を走っている往還に出る。そんなことをしないでももつともな道があった筈であるが、子どもたちは何とはなしに旧道でも新道でもない自分たちの専用道路を作っていた。歩きにくい上に遠回りになる、道とは言えないような道を選んで、専らそこだけを使っていた。

鮮やかな印象でそうした子供道の一つが思い出される。夏休みになると、子供たちは毎日のように溪川の水浴場へ行くのが日課であったが、いつも崖の斜面の細い道を伝って溪間の小さい淵へと急ぐ。大人などのめつたに通らぬ子供たちだけの道であった。溪に落ち込んでいる側の斜面には血のように赤い鬼百合の花が咲き、山側の斜面ではそこを埋めている木立から雨のように蟬の聲が降っている。午下がりの陽光に上から照り付けられながら、半裸の子供たちは一列になって、その道を駆けている。蜻蛉の群れが次々に顔にぶつかる。青い水を湛えたインキ壺のような淵に一刻も早く身を投じただけの思いで、子供たちは今にも点火して燃え上がりそうな体を必死に川瀬の音の聞えている溪間へと運んで行く。今思うと、そこには

②

のである。その後再び訪れて来たことのない強烈な夏が、確かにその幼時の子供道にはあったと思う。夏の思い出ばかりでなく、幼少時代に一度やって来て、その後再び訪れることのない周囲の自然との取引きの鮮烈な印象は、その多くが **A** 子供たちが自ら選んで支配下に置いた子供道の思い出につながっている。その後再び、そこにあつたような夕映えの美しさも、薄暮の淋しさも、夜の怖ろしさも経験することはない。風の音までが子供道においては凍々と鳴っていたのである。

夕方、娘が自家へ帰ると言って書斎に顔出しにやって来た。そして昼間杏の木のところまで口に出した子供道の話に一応締め括りをつけておこうとでもいうつもりか、でもこの春から小学校に通い出したでしょう、こんどは集団登校ですから、もう子供道は通れませんかと言った。孫娘のことであった。集団登校の一団の中に嵌め込まれている小さい姿が眼に浮かんで来た。 **B** その小さい体が全身で抗議しているように、私には見えた。

(井上靖『道』より)

問一 本文中の①に入る語（後の言葉に続く形で活用させて入る）として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 届ける イ 巡らす ウ 募らせる エ 致す

問二 「私」と「娘」の間のやりとりの中で、「私」が「娘」の話を聞いて気付いたことは何か。「ということ」に続ける形で、本文の表現を抜き出せ。

問三 本文中の②には、どのような表現が入るか。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア これこそ夏であると言えるような夏があった。

イ これこそ子供道であると思える子供道があった。

ウ これこそ子供の遊びといえるような遊びがあった。

エ これこそ伊豆半島の夏といえる夏の風景があった。

問四 傍線部A「子供たちが自ら選んで支配下に置いた子供道」とは、どのようなことを言っているか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 子供道はいろいろな道から子供達を選び、一つの道だけを大事にしたものであるということ。

イ 子供道は与えられたものではなく、遊びの中で自らの意思で作りに上げたものであるということ。

ウ 子供道はたくさんのおいしさを作り出す道であり、それができるのは子供だけの特権であるということ。

エ 子供道は子供の時期だけのものであり、その時期が過ぎれば再び戻ることのないものであるということ。

問五 傍線部B「その小さい体が全身で抗議している」とあるが、なぜこのように見えたのか。その説明として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 子供道を奪われたつまらなさが想像できたから。
- イ 集団登校はこの孫娘には合わないと思っていたから。
- ウ 母親の言いなりにならざるを得ない悔しさを感じたから。
- エ 孫娘より年齢の高い集団の中にいることを不憫に感じたから。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

過ぎにし秋のころ、右兵衛の舎人なるもの、東の七条に住みけるが、つかさに参りて、夜更けて家に帰るとて、応天門の前を通りけるに、人のけはひしてささめく。廊のわきに隠れ立ちて見れば、柱よりかかぐり下るる者あり。あやしくて見れば伴大納言なり。次に子なる人下る。また次に雑色豊清といふ者下る。何わざして下るるにかあらんと、**A**つゆ心も得で見ると、この三人下りはつるままに走ること限りなし。南の朱雀門さまに走りて**B**いぬれば、この舎人も家さまに行くほどに、二条堀川のほど行くに、大内のかたに火ありとて大路**a**ののしる。見返りて見れば、内裏のかたと見ゆ。走り帰りたいれば、応天門のなからばかり燃えたるなりけり。この**b**ありつる人どもは、この火つくとて、上りたりけるなりと心得てあれども、人のきはめたる大事なれば、あへて口よりほかに出ださず。そののち、左大臣のし給へることとて、罪かうぶり給ふべしと言ひののしる。**C**あはれしたる人のあるものを、いみじきことかなと思へど、言ひ出だすべきことならねば、**D**いとほしと思ひありくに、大臣ゆるされぬと聞けば、罪無きことは、つひにのがるものなりけりとなん思ひける。

(『宇治拾遺物語』より)

問一 二重傍線部 **a**・**b**の口語訳として正しいものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

a 「ののしる」

ア 非難している

イ 大騒ぎしている

ウ うわさをしている

エ 罵声を浴びせている

b 「ありつる」

ア かつての

イ ここにいる

ウ いたはずの

エ さっきの

問二 傍線部 **A**「つゆ心も得で見ると」とあるが、この部分の解釈として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

ア 相手の気持ちをはかりかねて見ていたが

イ 納得がいかない気持ちのまま見ていると

ウ ようやく意味が分かったので見てみたが

エ さっぱり訳が分からないままに見ていると

問三 傍線部B「いぬれ」と同じ活用の種類の動詞を、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 見る イ ある ウ 侍り エ 寝 オ 死ぬ

問四 傍線部C「あはれしたる人のあるものを」とあるが、この部分の解釈として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 痛ましい思いをした人がいるのに
イ ああ、無実の人であるはずなのに
ウ ああ、火をつけた別の人がいるのに
エ 悲しい状態の人であるはずなのに

問五 傍線部D「いとほしと思ひありくに」とあるが、この部分の解釈として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 嫌だと思つて悩んでいるうちに
イ 何か手に入れたかと思つていると
ウ かわいらしいと思つて歩いていけると
エ 気の毒に思つて過ごしているうちに